

■第2部

パネルディスカッション

テーマ：「支援者の支援を考える」

登壇者

安達 智子氏（南陽市社会福祉協議会 生活支援相談員）

高田 篤 氏（一般社団法人 東北圏地域づくりコンソーシアム 事務局長）

荒木 三香氏（マインドセルフ 代表）

司会

復興ボランティア支援センターやまがた 事務局長 結城 健司

【司会】

- ・本来の支援者のつどいは避難者を中心に意見を交わしてきたが、100回目ということで支援者にフォーカスを当てて考えてみようと、このテーマに決めた。

<避難者と接して感じたこと>

- ・いろいろな県からの避難者がいて、賠償の対象、区域がそれぞれ違うため、同じような対応ができず苦勞した。
- ・宮城県の避難者から「福島県だけの支援でしょ」と言われ無力感を感じたこともあった。
- ・放射能は目に見えず、コロナと同じで心理的に分断に繋がりやすく、曖昧な喪失体験をされている。
- ・沖縄・北海道に避難した人は覚悟を決めて移った方が多かったが、山形への避難者は片足半分、何事も決断できないことが多く常に不安を抱えている。また、元々抱えていた葛藤・問題が震災で大きくなった人や、自分の負の感情を支援者に向ける方もいた。
- ・災害時の課題は普段抱えている課題の集合体ではなく、生活すべてが課題となる。だからこそ、生活者・当事者だからできる支援が大切である。当事者だから支援者になれる訳ではなく、俯瞰して捉える視点を獲得するまでが難しいプロセスである。

<避難者の自立支援について>

- ・今年に入って避難者登録を外したいという人がいた。年金で生活ができていて、お世話になるのが申し訳ないとのこと。数年前には避難者と市民を使い分けるのが心苦しいと、登録を外された方もいた。
- ・避難者登録が重荷になっている方や、自立したいと頑張っている方もいる。
- ・支援する側、される側という立場がなくなっていくことが理想だ。
- ・心の自立と経済的な自立をしていくことが重要である。
- ・物を配れば人は集まり感謝されるが、それを双方がよしとしているのは、いびつに感じる。
- ・当事者が暮らす地域の中で、一定の役割を持って生活できているかが大切で、役に立っているという意識が誇りに繋がる。支援者としては避難者が持ちつつあるそういった関係性を認め評価してあげることが良い。個々のケースの状況というよりも、地域や家庭との関係性の中で考えてあげるのが大切だ。
- ・避難者の自立の目指すところとは、自分で生活を立て直していただけるのが理想であり、我々支援者はそのための伴走支援をすることが重要である。

<仕事・業務としての避難者支援>

(安達氏)

- ・行政機関に相談することが多いが、地域包括や自立支援の部署などにも相談している。
- ・任意団体で活動してきたので、大きな予算には手が届かなかった。活動していく上での持ち出しも多かった。
- ・目の前に課題を抱えた人がいて、自分達の手で資源調達をして解決できるのであれば活動していく、というスタンスを外してしまうといろいろな問題が出てくる。実績に対する総括は必要だと感じている。

<支援者のスキルアップ・ケアについて>

- ・資格もないまま、求人募集を見て入職したが研修は必要だったと思う。ただ、資格がないからこそ、簡単に相談してもらえたのではないか。特に研修が必要だと思ったことは精神障がい者への対応で、上司に相談しながら進めた。
- ・専門家でなくても、信頼できる相手と話をしたい。解決しなくても話をすることが大切だ。聞く側の立場では、話の内容をジャッジしないで黙って聞いてあげて欲しい。

- ・ 支援員の導入がうまく行かなかったのは、役割が曖昧だったケースが多い。しかし被災者の声を聞き取り、専門家につなぐまでを役割として成功した事例もある。被災者が自己決定をしていく支援、身近な他人として寄り添う支援といったことは結構難しい。マニュアルがあればできるわけではなく、支援員が経験したことを聞き、受け止め、必要に応じて打ちかえす、そのような役割が必要。
- ・ このような時間がかかる支援は、行政や社協が苦手とする部分だ。ただ、それがうまくいくと、支援員は大きく成長する。
- ・ 避難者支援が終わっても、地域で支援にあたる貴重な人材になる。
- ・ 平時の仕組みへ、今までの仕組みをどうつないでいくかが大切になる。

＜避難者支援はいつまで続くのか＞

- ・ 避難者支援事業がなくなれば、社協にいることは難しくなる。まだ働ける方もいるのでぜひ、考えていただきたい。
- ・ いつまで続くのかわからない、というのは人にとって大きなストレスである。
- ・ 避難者支援事業でないと解決できない課題がなくなったら終わりである。市町村単位では難しいので、県としての役割が期待されるころだ。

【司会】

- ・ ゲストの皆様、熱きディスカッションお疲れさまでした。「支援者」という立場でこの11年間を振り返るとともに、課題や反省点を今後どう結び付けるか考える貴重な時間だったと思う。
- ・ また、ディスカッションの最後に「支援の最後はどうなるのか」について少し触れたが、深く話し合いをしなければならない重要な議題である。このことについては別立ての場で話し合えればと思う。
- ・ 最後になるが、本日は多くの方々より応援のお言葉・メッセージを頂いた。これまで継続できたのも関係者の皆様のご協力・ご支援のおかげだと改めて感謝申し上げたい。
- ・ 支援者のつどいは結論を求めないスタイルでやってきた。参加者がいなければ議論も生まれにくい。常に来やすい環境を作り、皆さんが思っていることを話し合ってもらえる場としてこれからも継続していきたい。
- ・ 本日はありがとうございました。